

330. 古代の製鉄遺跡

－大津市後山・畦倉遺跡の調査成果－

1. はじめに

大津市後山^{うしろやま}・畦倉^{あぜくら}遺跡は、雄大な比良山地の麓に位置する古代の製鉄遺跡です。

この遺跡の中央部分に、国土交通省が国道161号志賀バイパスを建設することになり、工事によって影響を被る地点について、事前に発掘調査を実施し、遺跡の状態・内容を把握する必要が生じました。

そこで、滋賀県教育委員会を調査主体として、財団法人滋賀県文化財保護協会が調査機関となって、平成17年度に発掘調査を行いました。

調査の結果、奈良時代後半頃に操業された製鉄の痕跡が出土しました。ここでは、今までの滋賀県各地の調査で分かり始めた古代の製鉄の方法と、今回の調査

で見つかった製鉄炉と鉄鉱石に焦点を当てながら、調査成果についてご紹介します。

2. 周辺の環境

遺跡の位置は図1・2のとおり、扇状地の最頂部に立地しています。周辺にはカシなどの照葉樹林が広がっており（写真1）、発掘調査はその中に設けられた林道とその周囲部分で行いました。

製鉄には、製鉄炉のほかに、原材料の鉄鉱石や砂鉄、燃料の木炭が必要です。このうち、カシの木を用いた木炭は火力が強いため、製鉄に適しています。実際、今回の調査でもイチイガシを用いた木炭のかけらがたくさん出土しました。当時も遺跡周辺にはカシの林が広がり、それを木炭にして製鉄に必要な燃料として使っていたことが分かります。

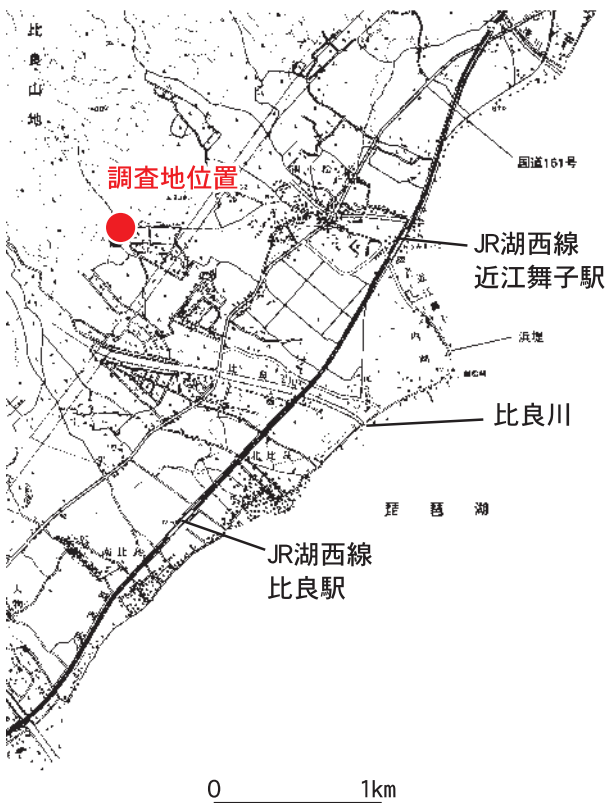


図1 調査地の位置

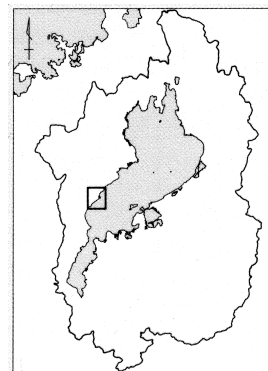


図2 太線枠内が図1の範囲です。



写真1 遺跡は山林の中이었습니다。

3. 古代の製鉄とその方法

鉄は歴史的に重要な資源です。土地を開墾する農具や他者を圧倒する武器の材料となるほか、荘厳な神社・仏閣等を建てる部材・工具の材料にもなる鉄は、富を生み出し、富を示すために使われています。

近江は、このような鉄を早くから盛んに作っていた国内有数の鉄生産地域の1つです。

特に、琵琶湖南端に位置する瀬田丘陵（大津市・草津市）では、古墳時代の終わり頃から平安時代にかけての製鉄遺跡が数多く見つかっています。また、後山・畦倉遺跡が位置する琵琶湖の西岸——比良山地の麓でも、13の製鉄遺跡が確認されています。

今回の調査や、これまでの県内各地の製鉄遺跡の調査成果を参考にすると、古代の近江の製鉄の方法は、図3のようになります。

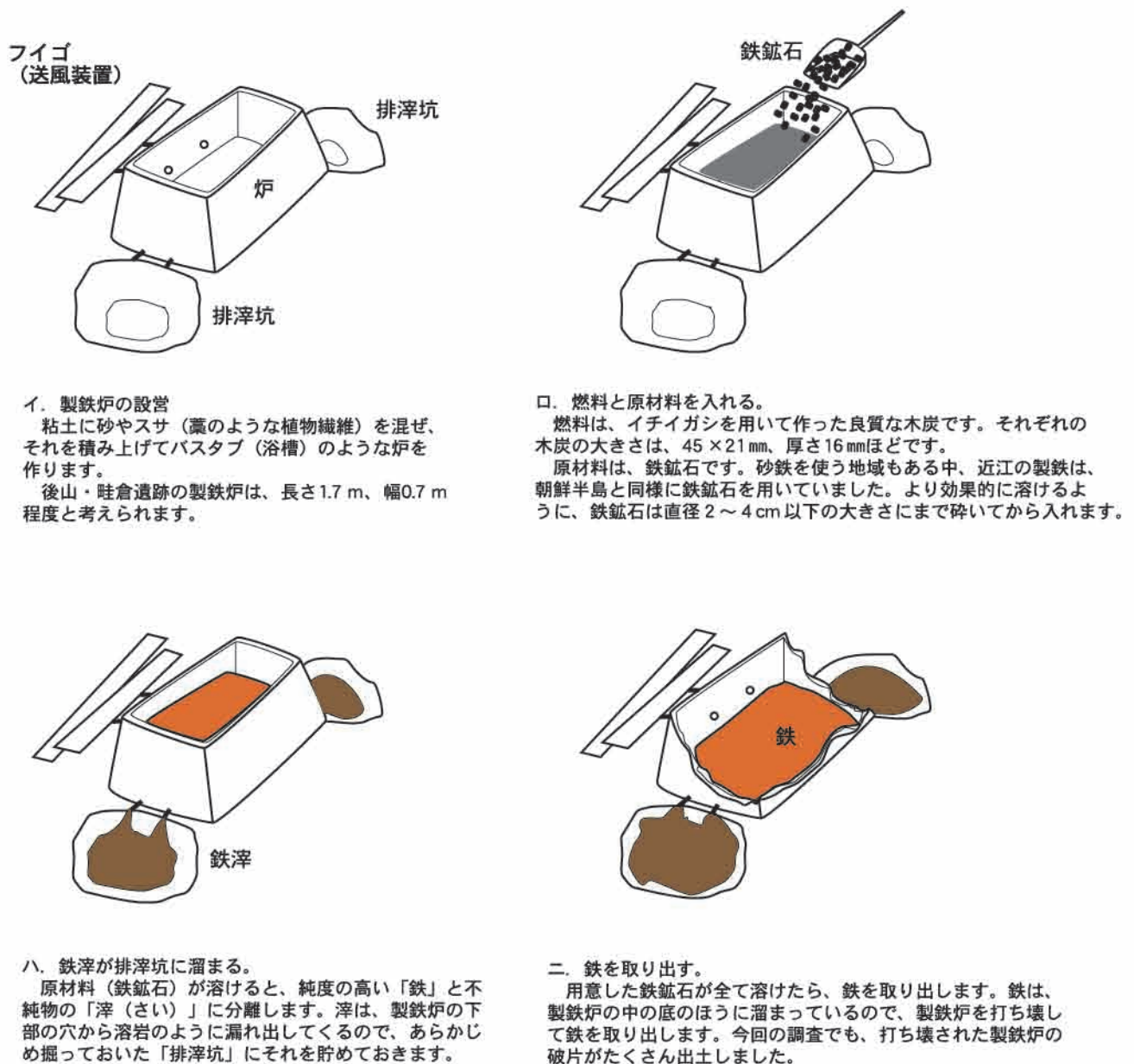


図3 製鉄の方法

4. 今回発見された製鉄遺構

今回発見された製鉄遺構は、写真2に示したとおりです。

写真の右半分が製鉄炉の部分で、平面の大きさは長さ1.7m、幅0.7m程度だったと考えられます。ただ、先述したように鉄を取り出すために打ち壊されていたので、本来の大きさは分かりません。

写真の左半分は排滓坑です。中には、溶岩のような鉄滓が溜まっています。最終的には直径1.9~2.3m、深さ0.4mだったことが分かりました。

図4は、同じ製鉄遺構を図面として記録した実測図です。発掘調査では、ただ掘り出すだけで無く、写真を撮り、図面にし、その記録を保存して後世に伝えるとともに調査成果をより多くの方々に知ってもらえるよう努めています。



写真2 検出した製鉄遺構（南西やや上から撮影）
左側の溶岩のようなものが鉄滓、右側が炉です。

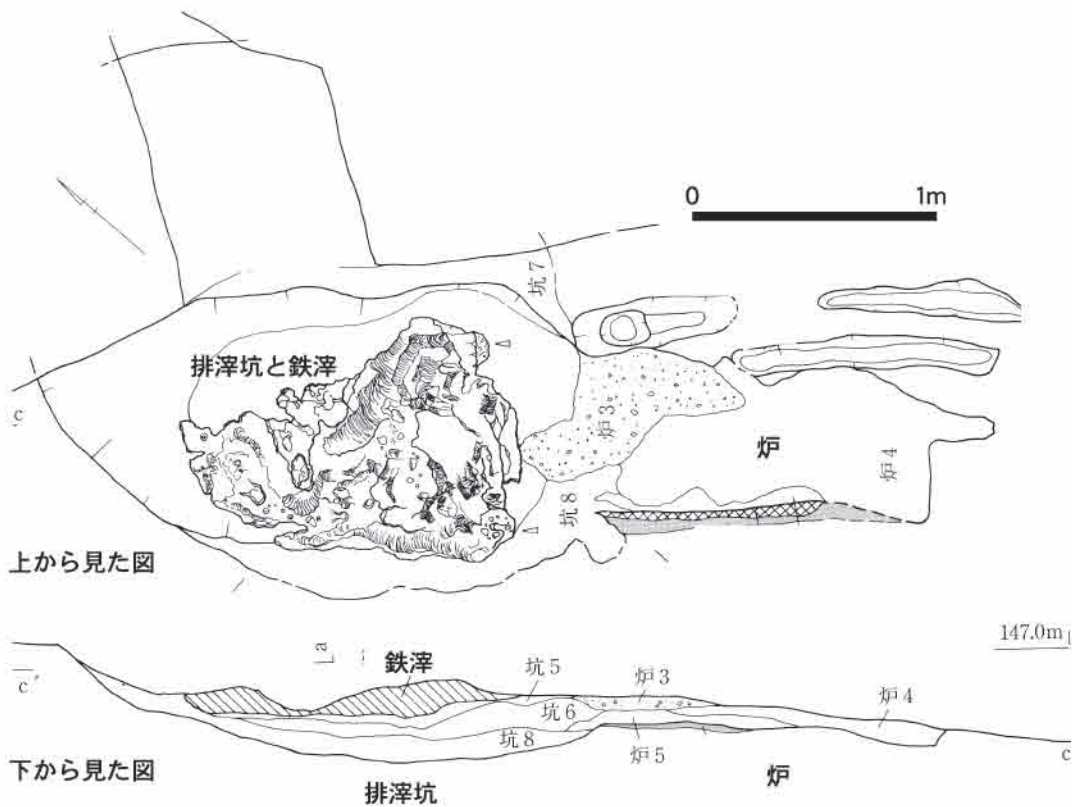


図4 検出した製鉄遺構（実測図）



図5 鉄鉱石が鉱脈がありそうな地点(太線内)と製鉄遺跡の分布(参考図書②から)

5. 製鉄炉設営の背景

図5は、琵琶湖西岸(中部)の地図です。太線で囲った部分は、鉄鉱石の鉱脈がある可能性をもつ範囲です。これをみる限り、比良山地から比叡山にかけては鉄鉱石の主要な産地の1つだといえます。このような産地が近くにあったため、琵琶湖西岸で製鉄が盛んに行われたといえます。

6. おわりに

以上、後山・畦倉遺跡の調査成果の概要について紹介しましたが、詳細については下記図書①として編集・刊行しています。また、近江の古代の製鉄に欠かせない原材料—鉄鉱石の研究については下記図書②に研究

成果が掲載されています。これらの図書は、いずれも滋賀県内の図書館等に納めていますので、御活用いただければ幸いです。

(財団法人滋賀県文化財保護協会 瀬口眞司)

参考図書

- ① 『一般国道161号(志賀バイパス)建設工事関係遺跡発掘調査報告書 後山・畦倉遺跡』 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2007年
- ② 大道和人「鉄鉱石の採掘地と製鉄遺跡の関係についての試論—滋賀県の事例を中心に—」『紀要』第9号 財団法人滋賀県文化財保護協会 1996年

写真提供：滋賀県教育委員会